

# 仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵第1堤における 遺構・遺物確認のための予備調査

## はじめに

仁徳天皇百舌鳥耳原中陵は大阪府堺市堺区大仙町に所在する。当陵は墳長 525 m を超える日本最大の前方後円墳であり、遺跡としての名称は大山古墳である。

今回の調査は、今後の実施が想定される当陵における保全整備工事計画を策定するにあたって、その基礎となる情報を収集するための当陵第1堤上における事前調査の実施に関する予算要求の積算根拠となる情報をえるため、予備的に実施したものである。  
(加藤一郎)

## 1 調査の経過など

調査は平成 29 年 10 月 16 日から 27 日まで実施し、当陵の第1堤上に A～D のトレンチを設けた(第 13 図)。当初は A～D の 4 箇所において、それぞれ長さ 3 m × 幅 2 m のトレンチを設ける予定であったが、調査状況などを勘案してトレンチの追加を適宜おこなった。その結果、B トレンチと C トレンチで追加のトレンチを設けたため、計六つのトレンチを調査することとなった。

今回の報告で使用する座標は、I T R F (国際地球基準座標系) にもとづいた世界測地系の平面直角座標第 IV 系をもちいており、図面において使用している方位記号の方角は座標北である。また、高さの基準には東京湾平均海面 (T. P.) をもちいた。

なお、調査中には大阪府教育委員会文化財保護課の中西裕見子氏、原田昌浩氏、藤井陽輔氏、堺市文化財課の小谷正樹氏、土井和幸氏、永井正浩氏からご指導賜った。

以下、各トレンチの状況を報告する。  
(加藤)

## 2 各トレンチの状況

### (1) A トレンチ (第 14、15 図、図版 15-2)

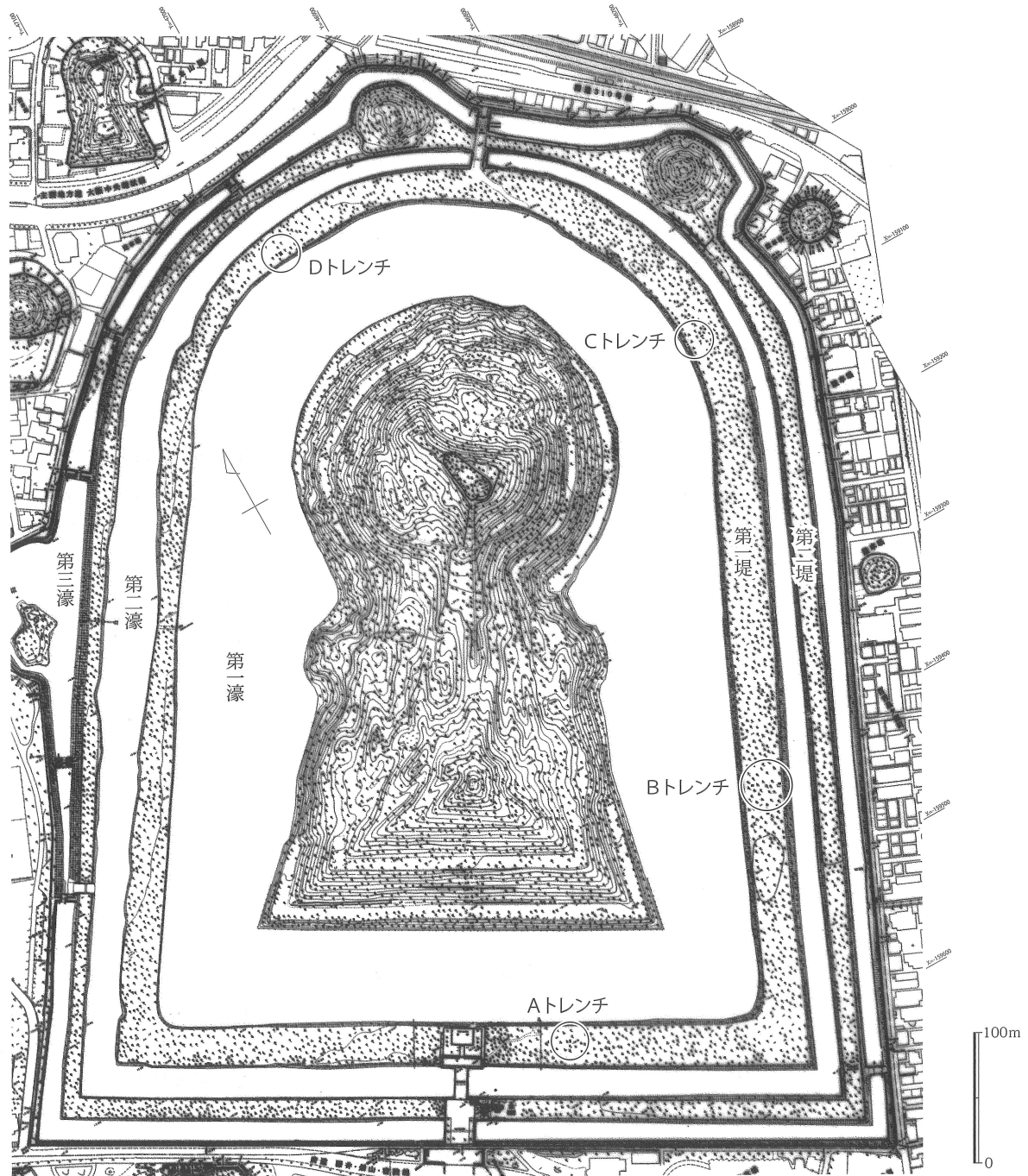
前方部前面に対面する部分の拝所東側に設けたトレンチである。トレンチの大きさは長さ 3 m × 幅 2 m で、第1堤上の第1濠にも第2濠にも面しない中央付近に設定した。

確認された土層は、上から表土 (I)、浚渫土である可能性のある土層 (II)、流土 (III)、盛土 (IV) である。II 層は黄灰色粘質土で、粘土ブロックが混じるものであり、百舌鳥陵墓参考地や東百舌鳥陵墓参考地における事前調査の際にみられた浚渫土に類似する。10cm 程度の堆積で、上述した参考地における浚渫土に比べるとかなり土量が少ないため、その可能性があることを指摘することにとどめておく。III 層は暗黄褐色砂質土で、盛土とした IV 層を起源とするものと考えられる。IV 層は黄褐色砂質土を基調としており、古墳の築造とともに第1堤を構築した際の盛土であろう。現在の地表面から 20cm 前後で盛土となっており、第1堤の拝所西側の第2濠際において、第1堤上面端の埴輪列を構成していると考えられる原位置の円筒埴輪を検出した調査時の所見とも齟齬をきたさない<sup>(1)</sup>。

A トレンチでは木の根による攪乱を確認した以外、顕著な遺構は確認されなかった。ただし、流土 (III) と盛土 (IV) の境界で小さい礫がわずかに確認された点は注意される。第1堤上面にバラス敷のようなものが設けられていた可能性も考えておく必要があるかもしれない。なお、出土した遺物は、III 層において埴輪片が 3 点確認された程度である (第 15 図)。  
(加藤)

### (2) B トレンチ

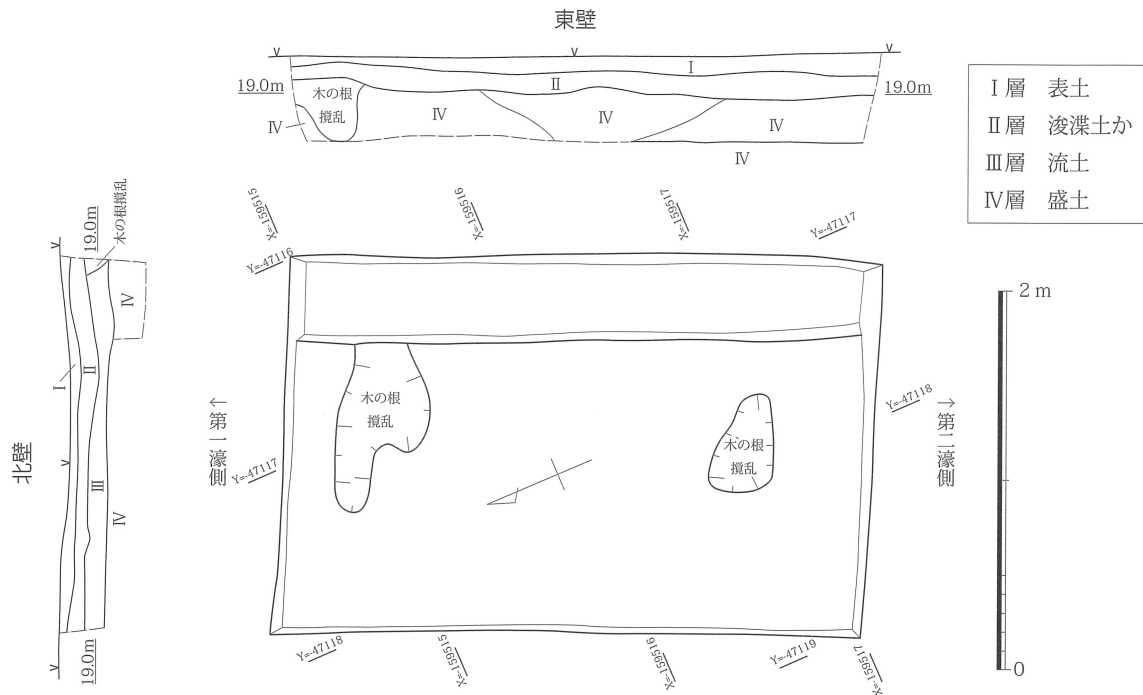
① B トレンチ西側 (第 16 図、図版 16) 第1堤の東側で前方部の中央付近にあたる箇所に 2 つのトレンチを設けた。本トレンチは第1号濠側 (西側) に位置する。トレンチの大きさは、長さ 3 m × 幅 2 m である。調査の結果、地表下 30cm 付近で地山を確認した。



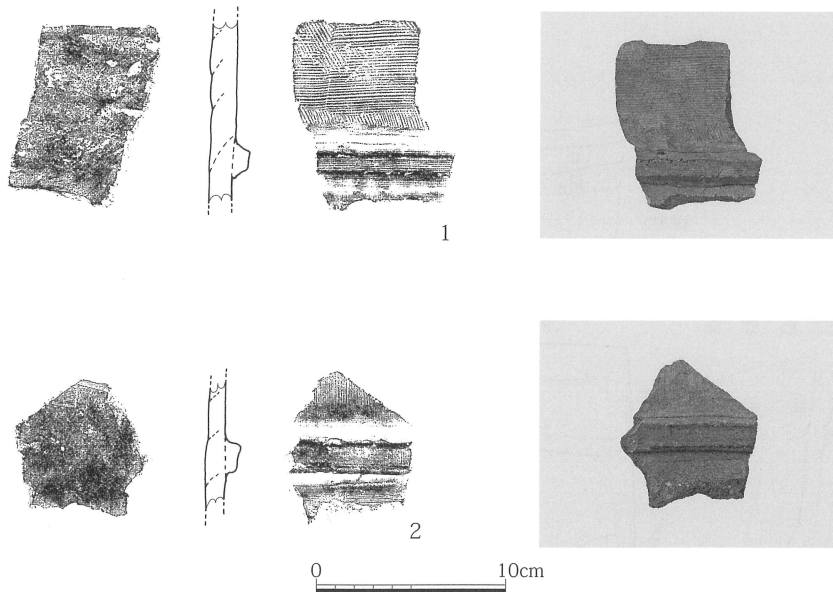
第13図 百舌鳥耳原中陵 トレンチ配置図 (1/5,000)

確認された土層は、上から表土 (I)、第1堤築造後の堆積土 (II)、地山 (IIIa)、地山 (IIIb) であった。表土 (I) は厚さ8~20cmであり、堆積土 (II) は厚さ10~20cmほどである。堆積土 (II) は暗黄褐色を呈しており、ここから3cmほどの埴輪片が多く出土した。

地山 (IIIa) は、地表下30cm (標高19.7 m) から厚さ10~14cmほどである。褐色に灰色の粘土ブロックが混じる層であり、礫はあまり含まれていない。地山 (IIIb) は、地表下40cmから確認した (標高19.6 m)。灰色に褐色がマーブル状に混じった色を呈しており、1~5cmほどの礫が多く含まれている。IIIa層とは色調と胎土で区別することができる。この2層には埴輪片が含まれていない。第1堤築造にともなう盛土か、あるいは地山である可能性が考えられたが、盛土単位が確認できないことから、地山層である可能性が高い。



第 14 図 百舌鳥耳原中陵 Aトレンチ平面図・断面図 (1/40)

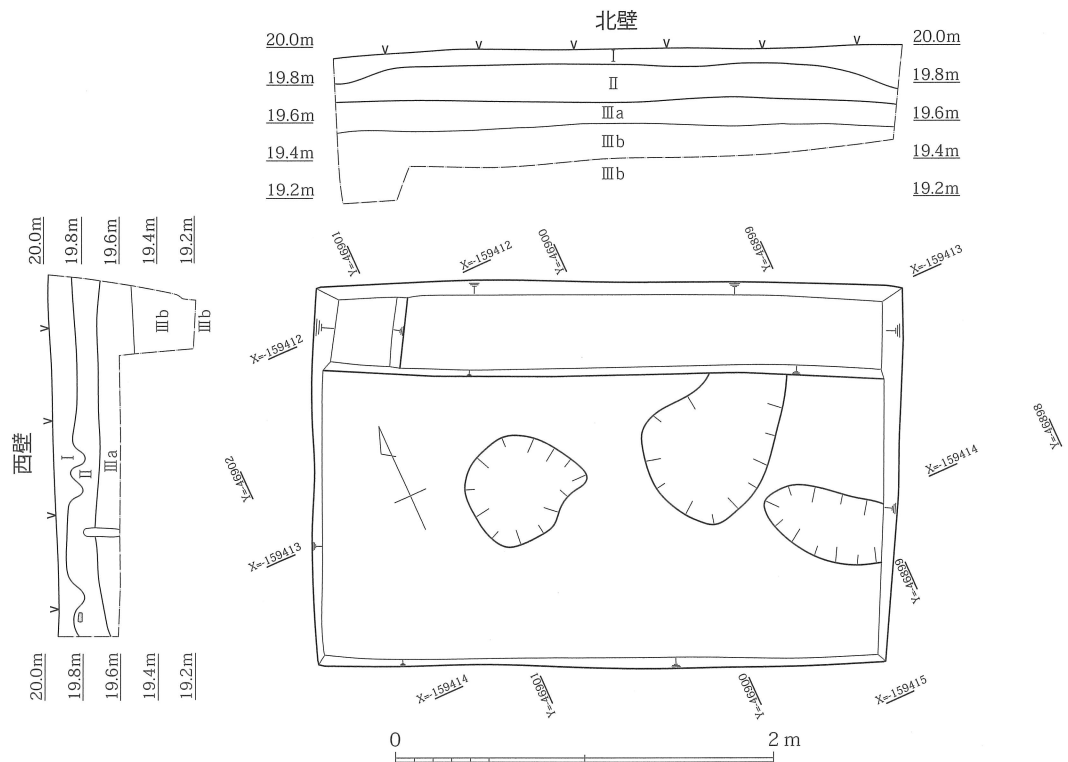


第 15 図 百舌鳥耳原中陵 Aトレンチ出土 円筒埴輪実測図 (1/4)

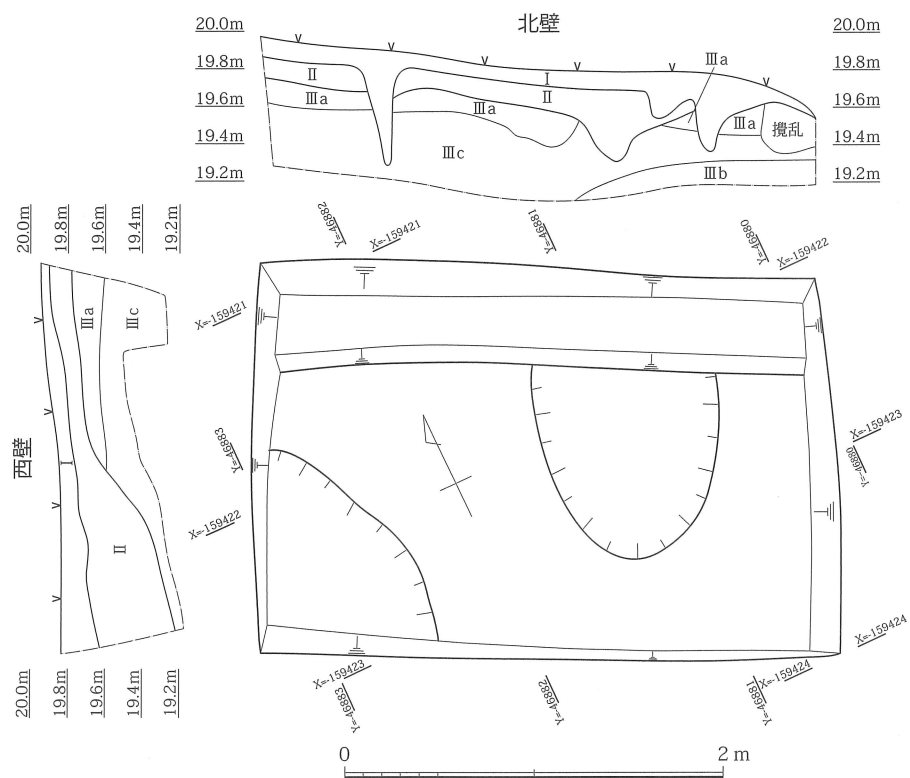
なお、埴輪片は6点出土したが、いずれも摩滅した細片であることから、図化はしていない。

②Bトレンチ東側(第17図、図版17) 本トレンチは第2号濠側(東側)に位置し、堤の平坦面と傾斜面の境付近に設置した。トレンチの大きさは、長さ3m×幅2mである。調査の結果、埴輪片を多数検出するとともに、地表下30cm付近で地山を確認した。

確認された土層は、上から表土(I)、第1堤築造後の堆積土(II)、地山(IIIa)、地山(IIIc)、地山(IIIb)であった。表土(I)は厚さ10cmほどであり、堆積土(II)は厚さ10cmほどである。根攪乱による改変が目立ち、場所によって深さは異なる。堆積土(II)は暗黄褐色を呈しており、ここから3~9cmほどの埴輪片が非常に多く出土した。



第16図 百舌鳥耳原中陵 Bトレンチ西側 平面図・断面図 (1/40)



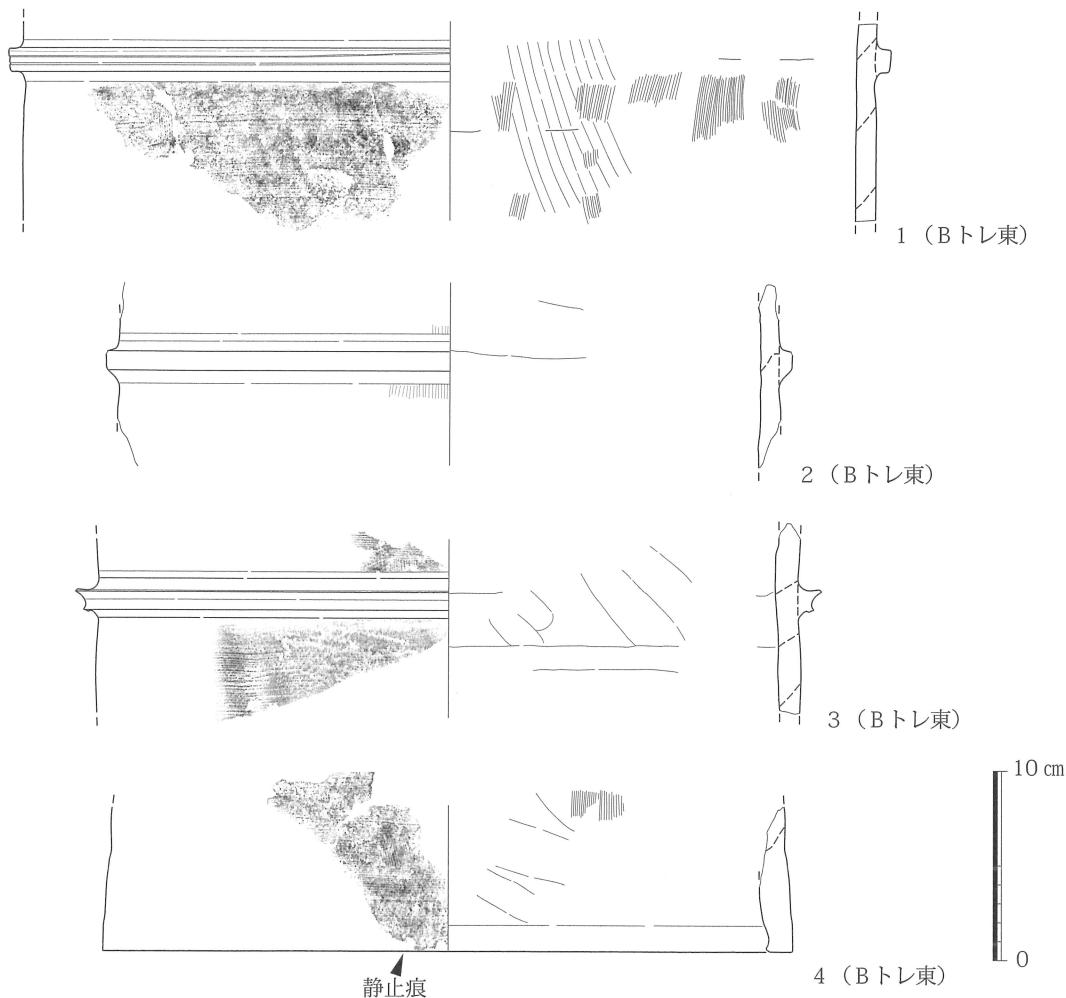
第17図 百舌鳥耳原中陵 Bトレンチ東側 平面図・断面図 (1/40)

地山（Ⅲa）は、地表下20cm（標高19.7m）から厚さ14～18cmほど確認した。灰色に褐色がマーブル状に混じった色を呈しており、礫は含まれていない。西側トレンチのⅢa層に対応する。地山（Ⅲc）は、地表下30cm（標高19.6m）から確認した。厚さは40cm以上あるようである。Ⅲa層よりはやや明るい色を呈しており、礫は含まれていない。西側トレンチには対応する層はみられない。地山（Ⅲb）は、地表下50cm（標高19.3m）から確認した。Ⅲcとほぼ同じ色調であるが、1～5cmほどの礫を多く含む点で区別することができる。西側トレンチのⅢb層に対応するが、西側トレンチでは標高19.6mから確認されるのに対して、東側トレンチでは標高19.3mから確認される。場所によって地山層の構成がやや異なっていたようである。この3層には埴輪片は含まれていない。西側トレンチと同様に細かな盛土単位もみられないことから、地山層である可能性が高いと考えている。

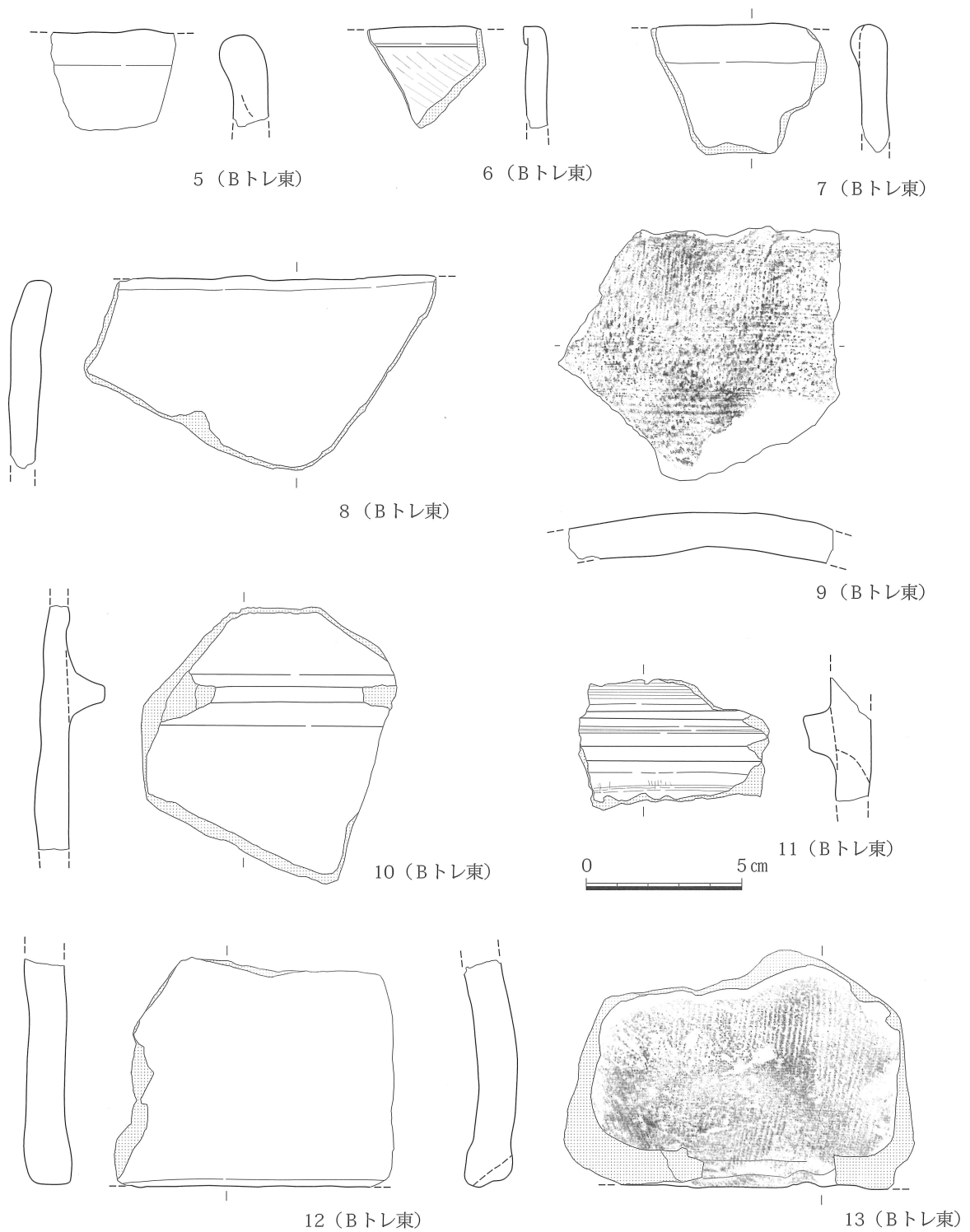
原位置の埴輪を検出することはできなかったが、Ⅱ層からは底部を含んだ非常に多くの埴輪片が出土したことから、周辺にはもともと埴輪列が設置されていた可能性が高いと考えられる。

**埴輪（第18、19図、図版20、21-1）** 径が復元できるものや部位が特定できるものを中心に図化した。全てⅡ層から出土したものである。埴輪は、全て円筒埴輪の破片である。口縁部、胴部、底部の破片が確認できる。

破片からの推測ではあるが、復元径は個体ごとに違いがあり、復元径40cm以上の大型のもの（第18図1）と、35～38cm程度の中型のもの（第18図2、3、4）がある。口縁部形態は、外反して端部に丸みもつもの（第19図5、8）と、端部を肥厚させたもの（第19図6、7）があり、突帯形態は、断面台形のもの（第



第18図 百舌鳥耳原中陵 Bトレンチ出土品実測図（1）(1/4)

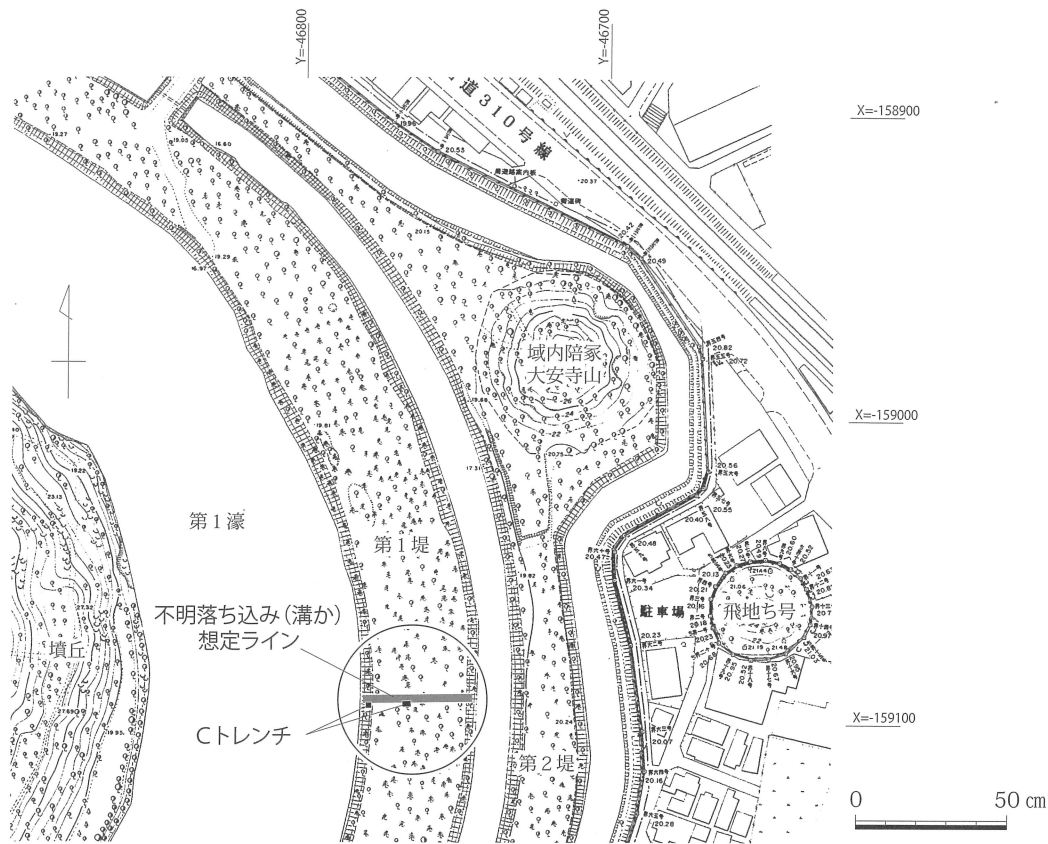


第19図 百舌鳥耳原中陵 Bトレンチ出土品実測図(2)(1/2)

18図1, 2、第19図10)と断面M字形のもの(第18図3、第19図11)がみられる。

外部調整は、底部(一段目)付近の破片(第19図13)にはタテハケのみがみられ、その他には1次調整タテハケの後、2次調整ヨコハケがほどこされる。とくに、右斜め上方向の静止痕がみられる個体(第18図4)は、途中で欠損しているため確定はできないものの、Bc種ヨコハケの範疇で解釈できると考えられる。

これらの埴輪には黒斑がみられず、全て窖窯焼成によるものである。色調は、黄褐色の個体(図版20-3, 6, 7, 8、図版21-10, 12)、灰褐色の個体(図版20-4、21-9, 11)、明赤褐色(図版20-2、21-13)、



第20図 百舌鳥耳原中陵 Cトレンチ位置図 (1/2,500)

暗赤褐色（図版20-1, 5）の個体にわけられる。

全体として、復元径、口縁部形態、突帯形態、色調に違いがみられることから、このトレンチ周辺には複数個体の円筒埴輪が並んでいたと考えられる。（土屋隆史）

### （3）Cトレンチ

後円部の東側に対面する第1堤上に設けたトレンチである。当初は、第1堤の中央付近に長さ3m×幅2mのトレンチを設定するのみであったが、その延長上の第1濠際に長さ2m×幅2mのトレンチを追加して設定した。ここでは、前者を第1堤中央付近トレンチとし、後者を第1濠側トレンチと呼称することとする。

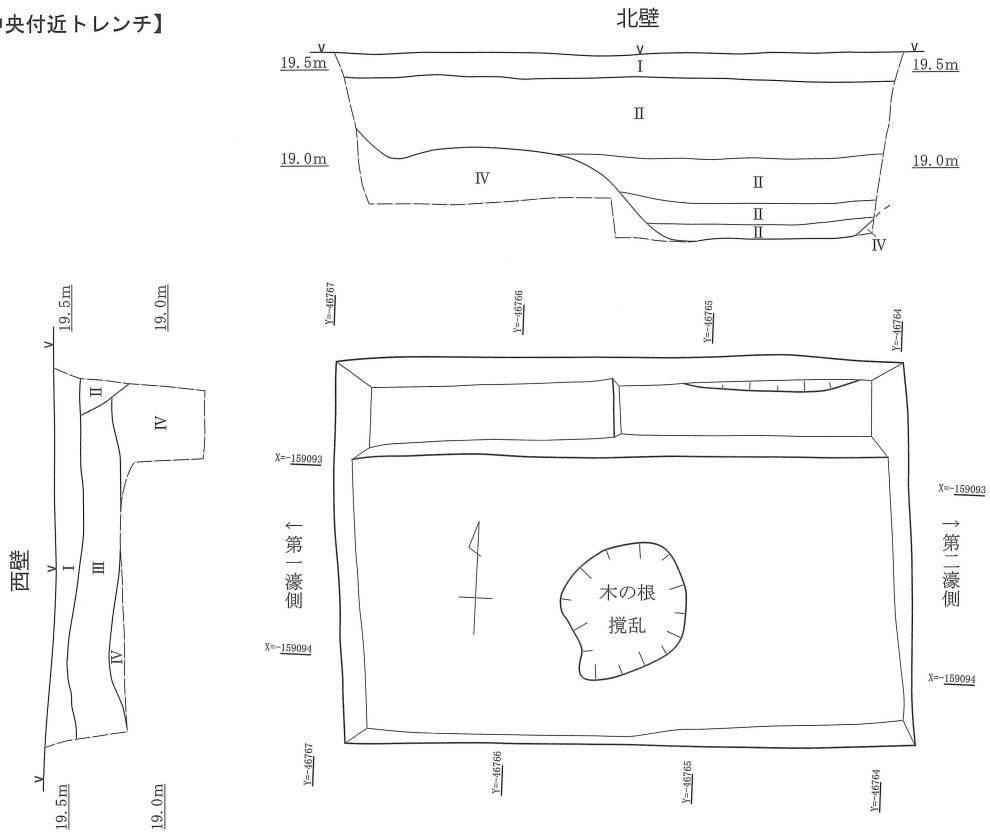
①第1堤中央付近トレンチ（第20～22図、図版18-1） 確認された土層は、上から表土（Ⅰ）、不明落ち込み埋土（Ⅱ）、流土（Ⅲ）、地山（Ⅳ）である。Ⅱ層は黄褐色砂質土を基調とし、Ⅳ層（地山）に由来すると思われる砂利や礫を含む。若干ではあるが、埴輪片も含まれており、古墳築造以降に形成された遺構であると判断した。Ⅲ層（流土）は暗黄褐色砂質土であり、埴輪片を少し含む。Ⅳ層（地山）は灰白色砂質土で非常に堅緻であり、礫を多く含む。現在の地表面から40cm前後で地山となっている。

上述した不明落ち込みは、トレンチの北辺に沿ってその上端がかるうじて確認されたのみであり、その全貌や性格を把握することは困難である。ただし、当トレンチの北辺に沿って延び、さらに後述する第1濠側トレンチにおいてもトレンチ北辺に沿って同様の落ち込みが確認できることから、第1堤を横断するような落ち込みが存在していた可能性が高いと考える。

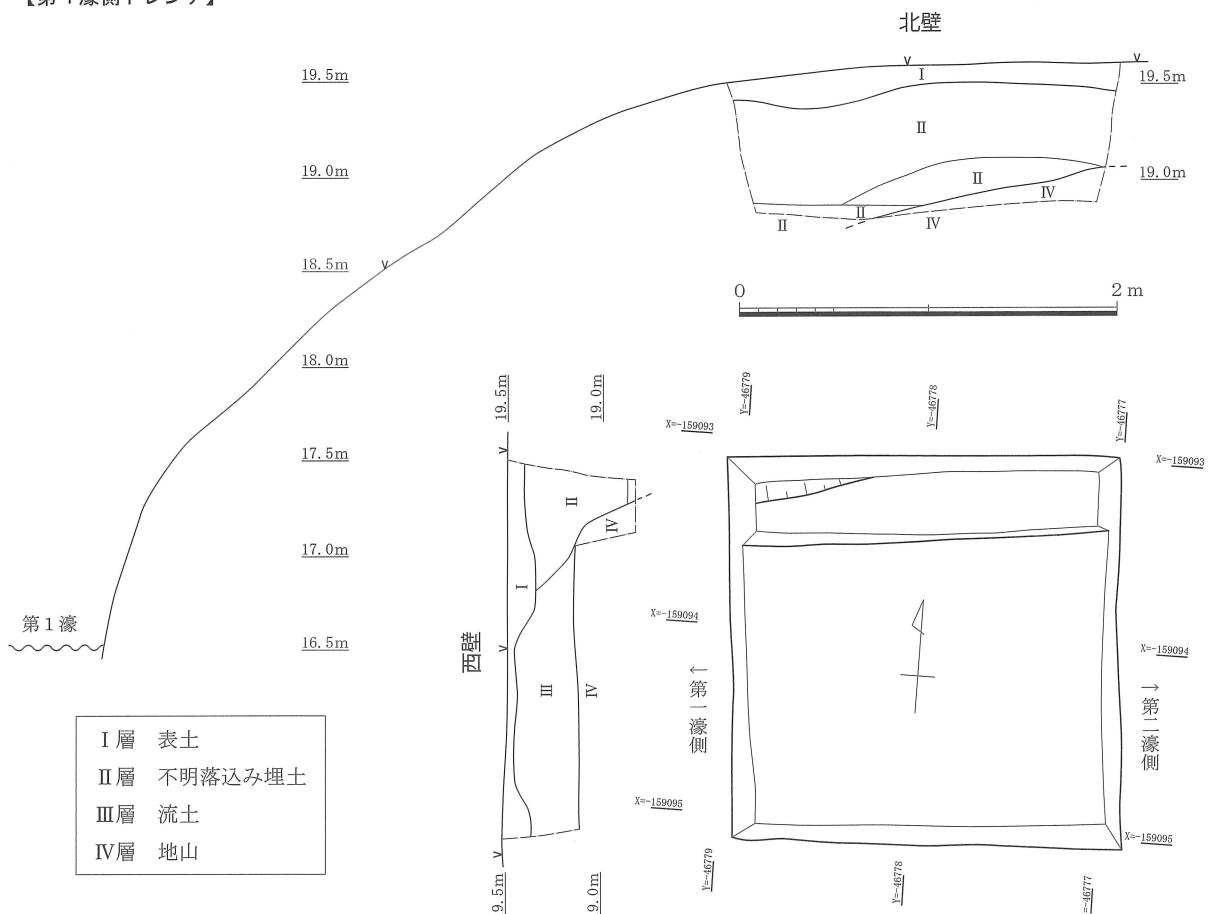
当トレンチでは、Ⅱ層とⅢ層から埴輪片など10点が出土している。そのうち、特徴的なものを図示しておく（第22図）。1は貼付口縁とされる形状の円筒埴輪口縁部の破片である。当陵においては珍しい口縁部形態といえる。

②第1濠側トレンチ（第20～21図、図版18-2） 確認された土層は、上述した第1堤中央付近トレン

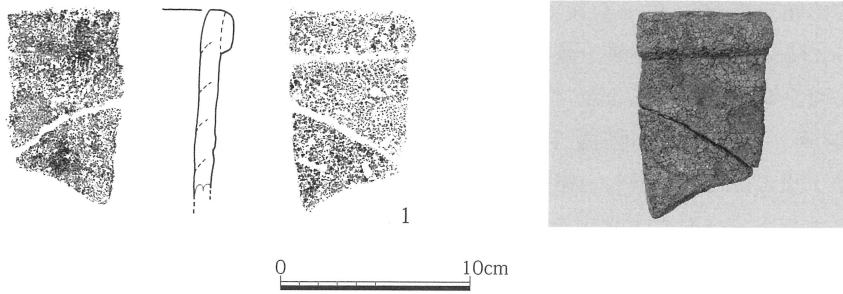
【第1堤中央付近トレンチ】



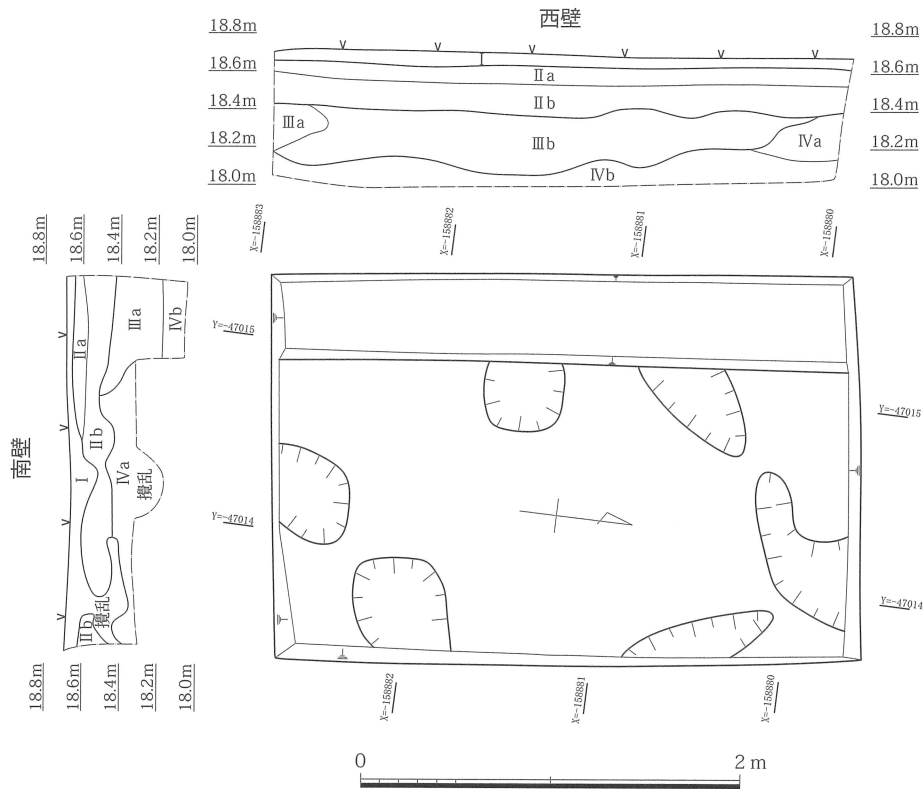
【第1濠側トレンチ】



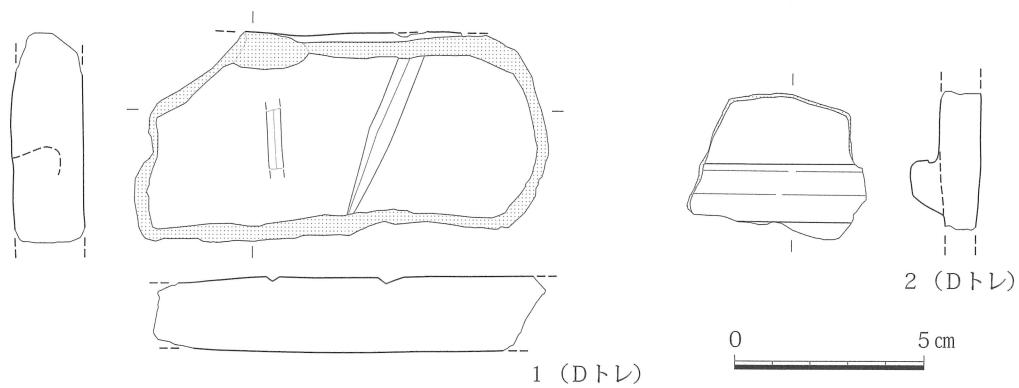
第21図 百舌鳥耳原中陵 Cトレンチ平面図および断面図 (1/40)



第 22 図 百舌鳥耳原中陵 Cトレンチ出土 円筒埴輪実測図 (1/4)



第 23 図 百舌鳥耳原中陵 Dトレンチ 平面図・断面図 (1/40)



第 24 図 百舌鳥耳原中陵 Dトレンチ出土品実測図 (1/2)

チと同様で、現在の地表面から 40cm 前後で地山となっている。当トレンチでは、Ⅱ層から埴輪の微細片が 1 点出土したのみである。第 1 堤の第 1 濠際に円筒埴輪列が存在していたとすれば、検出されてもおかしくない位置に設定したトレンチではあるが、そのような存在をまったく感じさせない状況であった。（加藤）

#### （4）D トレンチ（第 23 図、図版 19）

本トレンチは第 1 堤の北西に位置し、第 1 号濠側に設けた。トレンチの大きさは、長さ 3 m × 幅 2 m である。調査の結果、地表下 30cm 付近で地山を確認した。

表土（Ⅰ）は厚さ 6 cm ほどであり、堆積土（Ⅱ）は厚さ 20cm ほどである。堆積土（Ⅱ）は暗黄褐色を呈するⅡa 層と、灰色と褐色が混じるⅡb 層に区分できる。

地表下 30cm 付近（標高 18.4 m）から、明黄褐色を呈し粘土ブロックを含む地山（Ⅳa）と、灰色と褐色が混じった色を呈し礫を多く含む地山（Ⅳb）がみられる。両層ともに西側で落ち込みがみられ、そこに堆積した暗黄褐色土（Ⅲ）には埴輪片が含まれていた。この落ち込みが根攪乱によるものであるか、人工的なものであるかを確定することは難しい。Ⅲ層は、色調がやや明るいⅢa 層と、やや暗いⅢb 層に区分できる。

**埴輪（第 24 図、図版 21-2）** 埴輪片は 11 点出土した。その内、部位が推測できる個体を 2 点を図化した。これらはⅢa 層から出土したものである。どちらにも黒斑はみられず、窖窯焼成によるものである。第 24 図 1 は扁平な板状で、厚さは 2.0cm である。表面には、幅 0.4 ～ 0.7cm の線刻が 2 箇所を確認できる。形態的特徴と線刻からみて、蓋形埴輪の飾板か、家形埴輪の破片であると考えられるが、確定はできない。第 24 図 2 は、円筒埴輪の胴部の破片である。突帯は断面台形を呈している。表面は摩耗しており、外部調整は確認できない。（土屋）

## まとめ

今回実施した予備調査の調査面積は、当陵第 1 堤の広大な面積からすれば微々たるものであり、その結果を普遍化できるのかについては、慎重にならざるをえない。この点を踏まえ、今回の予備調査の所見を以下にまとめておく。

まず、当陵完成時の面と考えられる地山や盛土が、A～D のいずれの地点においても、現在の地表面から 20 ～ 40 cm ほど下で確認されており、非常に浅いことが確認できた。確認された当陵完成時の面の標高は、A トレンチで 19.0 m（盛土）、B トレンチで 19.7 m（地山）、C トレンチで 19.2 m（地山）、D トレンチで 18.4 m（地山）となっており、海側（墳丘からみて北西側）が低く、反対側（墳丘からみて南東側）が高い傾向にある。したがって、自然地形をおおむね反映した結果とみてよいであろう。

また、今回の調査状況からみて、墳丘上だけでなく第 1 堤上にも円筒埴輪列が存在していたものと考えられる。しかし、その存在を積極的に認めることができるのは、第 1 堤上面の第 2 濠際のみであり、現状では第 1 濠際においてその痕跡を確認できていない<sup>(2)</sup>。第 1 堤の第 1 濠際における円筒埴輪列については、①当初から存在していなかった、②点的に配置されていた、③存在していたが崩落してしまった、などの可能性が考えられるが、その当否については今後の調査の進展にゆだねたい。

これらの結果を踏まえつつ、当庁では今後、当陵第 1 堤における事前調査をすすめていく予定である。

（加藤・土屋）

## 註

（1） 戸原純一「仁徳天皇陵野犬防止柵設置箇所調査」『書陵部紀要』第 26 号、宮内庁書陵部、1975 年。

（2） このことに関連して、梅原末治が後円部東側付近の第 1 堤の第 1 濠側において埴輪列がみられることを紹介している点が注意される。

梅原末治「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」『書陵部紀要』第 5 号、宮内庁書陵部、1955 年。



1 墳丘全景（第1堤南角から）



2 Aトレンチ（南西から）



1 Bトレンチ西側 全景（東から）



2 Bトレンチ西側 北壁（南から）



3 Bトレンチ西側 東壁（西から）



4 Bトレンチ西壁・北壁（南東から）



1 Bトレンチ東側 全景 (西から)



2 Bトレンチ東側 西壁・北壁 (南東から)



3 Bトレンチ東側 西壁 (東から)



4 Bトレンチ東側 北壁 (南から)



5 Bトレンチ東側 東壁 (西から)



1 Cトレンチ (東から)



2 Cトレンチ 第1濠側 (南東から)



1 Dトレンチ全景（北から）



2 Dトレンチ南壁・西壁（北東から）



3 Dトレンチ南壁（北から）



4 Dトレンチ西壁（東から）



5 Dトレンチ北壁（南から）



1 (Bトレ東)



2 (Bトレ東)



3 (Bトレ東)



4 (Bトレ東)



8 (Bトレ東)



5 (Bトレ東)

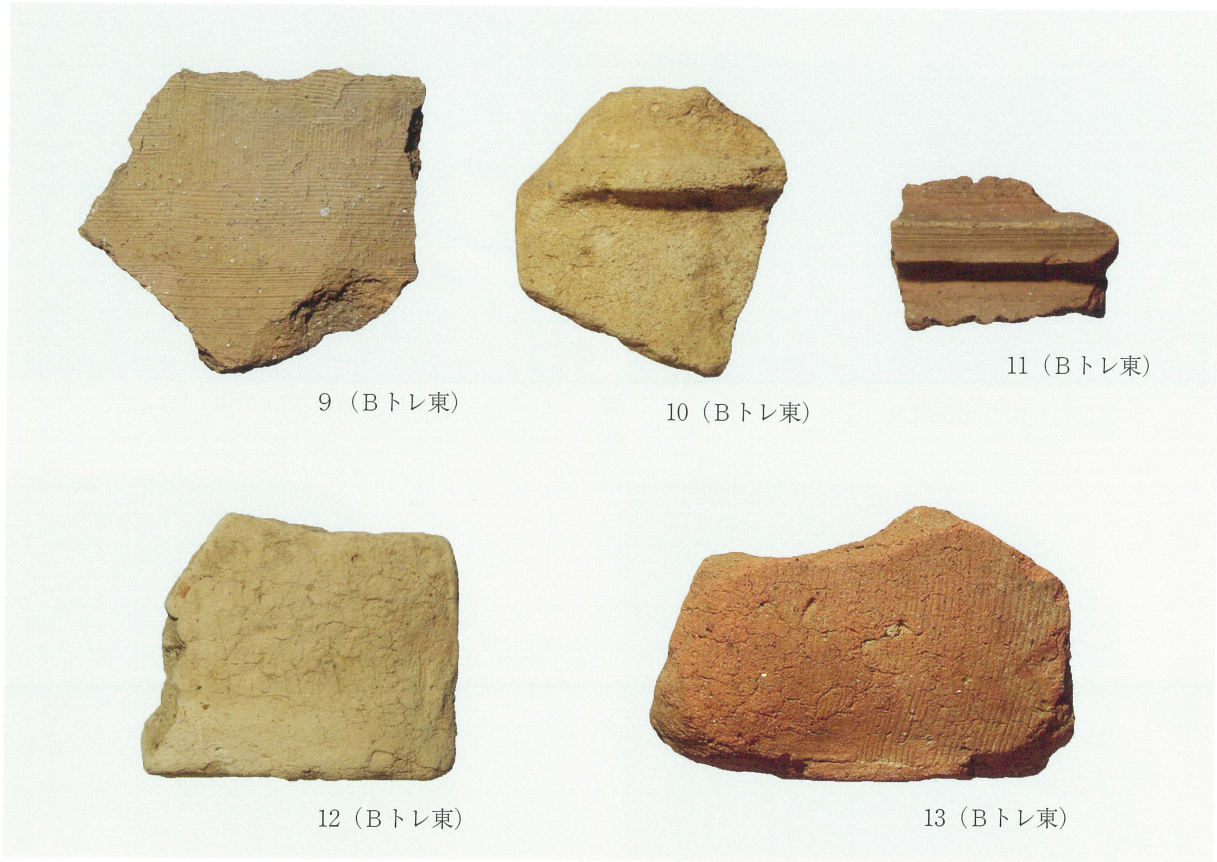


6 (Bトレ東)



7 (Bトレ東)

1 Bトレンチ出土埴輪 (1)



9 (Bトレ東)

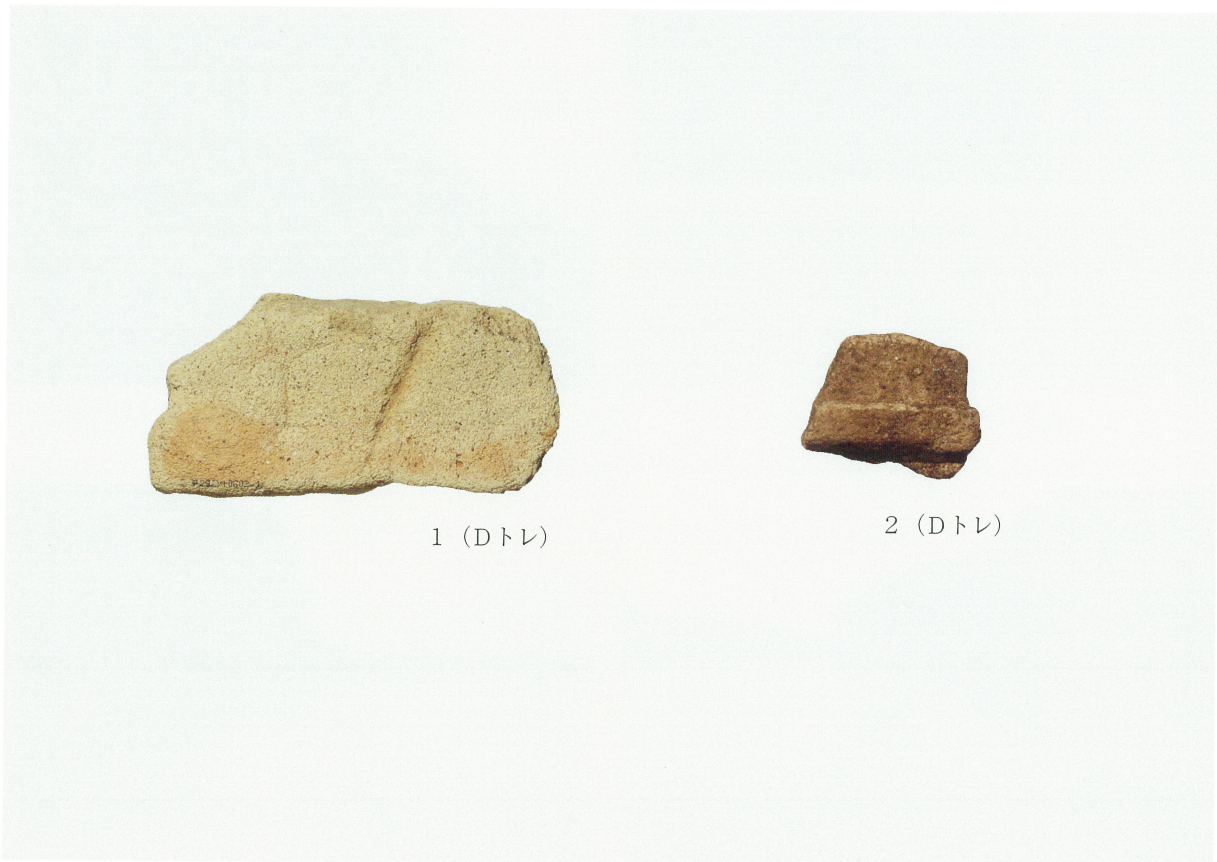
10 (Bトレ東)

11 (Bトレ東)

12 (Bトレ東)

13 (Bトレ東)

1 Bトレンチ出土埴輪



1 (Dトレ)

2 (Dトレ)

2 Dトレンチ出土埴輪